

氏 名	朴 實正 (パキホジユン)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 30 号		
学位授与日	平成 22 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	自作に内包される時空と経験 ～「層」		
審査委員	主査 教授	諸 川 春 樹	
	副査 教授	中 村 隆 夫	
	副査 教授	野 田 裕 示	
	副査 国立新美術館 副館長	福 永 治	

## 内 容 の 要 旨

われわれの身のまわりには気付いてはいないけれども、実はある現象の顕在として積み重なった「層」と日常で隣り合い、一緒に暮らしている。そして、ある日予測できないかたちでそれに遭遇するのである。例えば、湖を運転している時、急に目の前が霧がかかり、視野を妨げたり、いつも見ている月が雲の重なりによって隠れたり、町に雪が積もり普段の町の景色を変えたりすることがそうであろう。このようにある現象として現れる「層」がある一方で、昔のある遺跡を目の当たりにした時は、歴史として文化として遭遇する時間の隔たりによって生まれる「層」もあるだろう。このように観点によって様々な意味で解釈ができる「層」というものは、しかしながら、それが「層」と気付かずにやり過ぎてしまうことが多いのであろう。

上述した「層」のかたちとは少し異なるが、私のばあいは或る風景から、その風景を見る焦点が変わったことで「層」というものと出会ったのである。ある日並木の下からいつも見上げる空の風景が、その瞬間をさかいに、その風景に対する焦点が反転されたことであった。そして、その焦点の反転とは、木に向けられた焦点が、木の枝の輪郭から溢れ出す光を含む『空』に移行したことであった。しかし目に見えるその風景は、それ以前と変わりはなかった。この焦点の反転は、「普段あるものの成り立ちは当然である」という私の意識に疑問を投げかけるきっかけになる。そのなかでも特に、私が何気なく行っている作品作りが、私も気付いていないところで、ある原則を形成するのではいかという疑問をもたらしたのである。そして、その疑問に対するある答えに「層」というものを考察していることで近づくことができるのではないかと思うようになったのである。

われわれが気付かず日常で度々接するあの現象にある日突然、理由も知らず感動してしまうその出来事から、芸術家はそれを表現したいと思うだろう。そして、その現象が芸術家の感覚によって解釈され作品に生まれ変わると、その姿は様々なかたちを取るのである。私がある日遭遇したその風景の感銘も同様に、私の作品作りを働きかけたのである。その様子とは、木のかたちを木炭で描いて、その後、木のかたちから残された余白を白い絵の具で何重にも塗っていった。空を表現していくうちに、白い絵の具は描かれた木のかたちを、波が岩を少しずつ浸食させることのように、縮小させる。その結果、木というイメージは、作品の制作過程のなかで白い絵の具の積み重ねによって調節されて形作られるのである。

ここで、「キャンパスの奥から層を塗り重ねる」という行為のなかには、それが行われる時の、私の意識や、時間をも含んでいる。そして、それは当然ながら作品が作られている「制作過程」を経験することで認識できることである。作品の制作過程では、作品を作っている時の私の意識や時間とともに、私の身体行為や感覚の経過も積み重なって溶け込んでいる。このキャンパスの奥から表面に至るまでの制作過程を、その積み重ね（重畳）の様子から私はそれを「層」として捉えたいと考えている。

ところで、「層」というものから私は何を探ろうとしているのかという疑問が自分の中に生じるが、これについて答えの手がかりは、出来上がった自分の作品を眺めながら再考察してみることで可能になることではないだろうか。さらに、「層」と関係があると考えられる他作品を切ってみ、分析してみることによって、自分の作品からはなかなか得られない客観的な視野を獲得できるのではないだろうか。そして、その分析から、今までは気付いていなかった或ることが分かってくるのではないだろうか。

一瞬ではあるが、自分の意識がまるきり入り変わってくるほど、私の自分の日常から外れた強い経験をしたのである。このような一瞬の出来事は、日常のある断面とも言えるだろう。そして、何かの断面を目にし、それを並べてみることによって、私はこれが「層」というものにつながるのではないかと気が付いたのである。

この論文で論じた「層」、それを積み重ねていくことは、描いている私にとって自分の作品の行方を探っていく過程であると考えている。そして、作品を制作することは、自分自身を知る過程でもある。このことは、作品の制作過程が作品の画面の内側から外側へと向かえば向かうほど、それとは逆に、自分の思考は自分自身の外側から内側へと近づくことができるのではないだろうか。